

論文題目

異年齢集団活動を通じたグループワークスキルの形成のあり方と指導法について
- 倉敷市立万寿東小学校の縦割り班活動を事例として -

指導教授 山中芳和

論文指導教員 山口健二

岡山大学大学院 教育学研究科 学校教育専攻 22415010 堀江永芳

1. 研究の目的

倉敷市立万寿東小学校では異年齢集団での行事活動が多数ある。異年齢集団活動で指導を意図しているものをグループワークスキルと呼ぶことにする。グループワークスキルは狭義では集団課題遂行を効率化するためのスキルである。われわれは実際の指導場面ではコンセンサス形成、タイムスケジュールに沿った行動力、協力分担の三点を重視してきた。

また、グループワークスキルを広義でみるならば集団課題遂行スキルに加え、集団機能を潤滑化する様々な心理的レディネスが含まれる。われわれが重視しているのは、もちろんこの広義のグループワークスキルであり、実際の指導場面では上記3点に加え、自律心、相互依存心、一体感の三観点を身につけさせることが必要であると考えてきた。これらの能力を身に付けさせるために指導段階を3つに分け、準備期・助走期・離陸期とした。段階に応じて、上記の指導観点が達成されるように手立てをしたり、声かけをしたりしてきた。

私は倉敷市立万寿東小学校に転勤当初の平成10年から3年間縦割り班活動の担当として計画・指導を行ってきた。倉敷市立万寿東小学校では異年齢集団活動をする縦割り班を「なかま班」と呼んでいる。「なかま班」は各学年2・3人で総数20人弱の集団で構成され、全校28班ある。私がなかま班活動の担当になった当初はなかま班活動を学級活動の延長として扱っており、指導も各担任に任せていた。しかしこの体制では、指導に一貫性がなく、教師の役割分担も不明確であった。なかま班活動を特に意識した指導体制を新たに作り上げる必要を感じるようになったわれわれは、学年全体でなかま班活動にどう取り組むべきかを討議した。その後はなかま班の指導の責任者をおくこととなり、指導計画の共有、教師の役割分担の明確化を意識的に行うようになった。これにより児童の作業の効率もあがり、責任感も高まった。われわれがグループワークスキルに注目するようになったのも、この新たな指導体制のもと、子どもたちのグループワークも教師の指示待ちではなく、実質的に機能しはじめたからである。

こうした経験を踏まえ、本論文では異年齢集団活動を通じたグループワークスキルの形成のあり方と指導法について考察することとし、教師の指導や児童の変化を観察、調査した。集団課題遂行スキル、心理的レディネスなどはどうすれば効果的に身につくのか。これまで教師が経験的に処理していた部分を再検討するのがその目的である。

2. 論文の構成

はじめに

第1章 異年齢集団活動の現状と課題

第2章 倉敷市立万寿東小学校の取り組み

第1節 なかま班活動のあゆみ

第2節 平成15年度・平成16年度の活動状況

第3節 調査の概要

第3章 指導ヴィジョン

第4章 準備期

第1節 《6年生を送る会》

第2節 集団課題遂行スキル

第3節 心理的レディネス

第5章 助走期

第1節 《発足式》《こいのぼり集会》《なかま遠足》

第2節 集団課題遂行スキル

第3節 心理的レディネス

第6章 離陸期

第1節 《なかまフェスティバル》《万寿東小祭り》

第2節 集団課題遂行スキル

第3節 心理的レディネス

第7章 効果的な異年齢集団活動指導法

第1節 集団課題遂行スキルに関する児童の感想文

(1) コンセンサス形成

(2) タイムスケジュールに沿った活動

(3) 協力分担

第2節 心理的レディネスに関する児童の感想文

(1) 自律心

(2) 相互依存心

(3) 一体感

第3節 活動の反省と今後の課題

3. 論文の概要

第1章 異年齢集団活動の現状と課題

第1章では毛利(2004)の調査を元に全国の縦割り班活動の実施状況と取り組みについて概観するとともに倉敷市中心部4校で縦割り班活動の取り組みについて担当教師にインタビューした。

小学校における縦割り班の取り組みは、全国の約4分の3で行っている。内容は常時活動として清掃、遊びが行われ、行事・特別活動として遠足、運動会などが行われている。縦割り班活動は課題が多いにもかかわらず続けられている。教師は縦割り班活動に児童が参加するだけで終わるのでなく、異年齢との交流により副次的な効果を見出そうとしていた。

第2章 倉敷市立万寿東小学校の取り組み

第2章では倉敷市立万寿東小学校での縦割り班活動の取り組みについて開校時から現在までの概要を説明した。

平成16年度の倉敷市立万寿東小学校のなかま班(縦割り班)活動は、4月《発足式》、5月《こいのぼり集会》《なかま遠足》、7月《なかまフェスティバル》、11月《万寿東小祭り》、12月《餅つき集会》、3月《ひな祭り集会》《6年生を送る会》である。児童のリーダーとしての取り組みは、5年生の2月に《6年生を送る会》の企画・運営をはじめて行い、なかま班活動の一步を踏み出す。その後、1年間なかま班活動のリーダーとして行動し、3月の《ひな祭り集会》によってなかま班活動は終了する。

指導体制は全校を28のなかま班に分け、校長をトップにした指導体制で会の企画・運営の中心となる教諭を1名配置し、その下に各学年1名の担当教諭(計6名)がいる。こ

のメンバーで素案を検討した後に全職員で共通理解して活動が行われている。各なかま班の指導は全教諭がそれぞれに割り当てられ、共通理解を基にして行われる。

縦割り班の編成方法を詳しく述べる。縦割り班は集団内を1年生と6年生，2年生と5年生，3年生と4年生が1対1（1対2）のペアを組んで上級生が下級生の面倒を見るシステムが作られている。

調査の概要

本論文ではこれらなかま班活動の教育効果を見るために調査を実施した。その詳細を述べると、平成15年2月の《6年生を送る会》と平成16年度4月～11月の《発足式》《こいのぼり集会》《なかま遠足》《なかまフェスティバル》《万寿東小祭り》の企画・運営の様子を観察した。児童の活動中は教師の数が足りなく、児童のアドバイスや準備に指導者としても関与した。また、アンケート調査も児童の活動ポートフォリオに組み込む形で実施した。

第3章 指導ビジョン

グループワークスキルは狭義では集団課題遂行を効率化するためのスキルである。われわれは実際の指導場面では コンセンサス形成， タイムスケジュールに沿った行動力， 協力分担， の3つのポイントを重視してきた。さらに指導を3段階（準備期・助走期・離陸期）に分けて、段階ごとに詳しく指導目標を設定した。

[集団課題遂行スキル]

	準備期 2月	助走期 4月	離陸期 7～11月
コンセンサス形成	賛成か反対か の意思表示が できる	意見を調整し、 目標を定める ことができる	話し合いによっ て自分たちで 新しいものを 導き出すこと ができる
タイムスケジュー ルに沿った行動力	タイムスケジュー ルの意義を知る	ショートスパンの 計画を立て、 集団の行動を 方向付けるこ とができる	制約事項を十分 自覚した上で ロングスパン でも現実的な タイムスケジ ュールを立て ることができる
協力分担	分業の必要性 を知る	スムーズな係分 けができ、与 えられた責任 を果たすこと ができる	個人特性を配 慮した係分け を教師の支援 なく行うこと ができる

グループワークスキルを広義でみるならば集団課題遂行スキルに加え、集団機能を潤滑化する様々な心理的レディネスが含まれる。われわれが重視しているのは、もちろんこの広義のグループワークスキルであり、実際の指導場面では 自律心， 相互依存心， 一体感， の3つのポイントを身につけさせることが必要であると考えてきた。

[心理的レディネス]

	準備期 2月	助走期 4月	離陸期 7月～11月
自律心	自分のことを自分でできていない自己の反省・自覚ができる	自分のことは自分でできるようになり、さらに他のメンバーの動きに目が向く	下級生の自律を促す配慮ができる
相互依存心 (協調心)	高学年からのサポートがあったことを自覚する	サポートする喜びを知る	サポートされる喜びを知り、下級生にもサポートする喜びをわからせる
一体感 (共同体意識)	共同体意識が無意識のうちに形成されてきたことを自覚し、6年生のリーダーシップがあったことに気づく	共同体意識の形成を行い、共同体意識を強める働きかけが下級生にできる	共同体意識を下級生に持たせる働きかけをする

教師は児童に接する中で、常に自分で動いているという感覚を子どもから奪ってはならない。また、グループに対する指導である限り、ひとりひとりに密着して教師がサポートを与えるという指導であってはならない。このような教師の姿勢を「包み込むような指導」と呼ぶことにする。教師と児童の関係でみると放任主義と混同しやすいが教師は支援する立場を前面にだし、児童の自主性を啓発するものである。啓発する働きかけとしては意欲付け・賞賛などの声かけや児童が活動しやすい環境作りがある。環境には物的なものや精神的なものがある。どちらも事前に準備しておかなければならないが、精神的なものは配慮が必要で安定した状態で望めるようにしなければならない。

第4章 準備期

第4章では《6年生を送る会》を調査した。第3章で設定した指導目標を準備期段階でどのように児童が成長するかを観察した。教師の指導場面と児童の反応を対比させて、変化をみていった。

第5章 助走期

第5章では《発足式》《こいのぼり集会》《なかま遠足》を調査した。第3章で設定した指導目標を助走期段階でどのように児童が成長するかを観察した。教師の指導場面と児童の反応を対比させて、変化をみていった。

第6章 離陸期

11月《万寿東小祭り》(昔の取り入れ祭り)が行われた。これはなかま班2つを合わせたきょうだい班で遊びブースを出し、全校児童と近接する幼稚園児が遊びブースを巡る会である。遊びブースは4～6年生が運営し、会の前半と後半に分かれて、遊びブースの当番を交代する。この他のイベントとして、6年生の代表による鬼の衣装をまとった太鼓

の演奏，全校では喜びを着ての万寿東小音頭の踊り，栽培物の紹介と種を下の学年に渡す種送りがある。保護者も多数参観に訪れる。

(1) 集団課題遂行スキル

第3章で設定した指導目標の内，離陸期の集団課題遂行スキルについて実際の作業状況・指導場面から考察した。

「コンセンサス形成」について，《万寿東小祭り》の遊びブースで全校の児童が楽しむためには 下級生が内容を理解し，簡単にできるものでなければ満足してもらえないが条件としてあげられる。教師は児童に内容を考えさせるときの目安としていくつか遊びを紹介し，上記の2点をクリアしたものにするように伝えていた。教師は児童が条件付の中でも自主性を発揮して企画できることを期待していた。教師は企画が決まった班から黒板に書くように指示を出し，様子を伺うようにしていた。教師は重なる内容の企画がでると予想していたが，児童は黒板に書かれたものを見ながら内容を変え，自分たちで調整を行うことができていた。結果としては，過去にない遊びブースの内容は半数あり，話し合いによって児童は新しいものを創造することができていた。

「タイムスケジュールに沿った行動」について，ロングスパンの計画が必要になったのは《万寿東小祭り》であった。行事がつんでいた時期だったので準備の日数が短く，十分な時間を児童に与えることができない。短時間で能率よく作業をしなければならないためにも活動計画を綿密にしなければならない。活動日程表を児童に配布し，見通しをもつことを指示としてだしていた。児童は，間に合いそうにないときは自分たちで空きの時間に積極的に作業を行っていて，時間内に作業を終わらせるという見通しがもてるようになっていた。また，4・5年生に遊びブースの準備物を見通しをもって依頼する班もできており，ロングスパンの計画が立てられるようになっていた。準備に関しては，こいのぼり作り（4月）の時に材料が足りなくて困った経験を活かし，紙のサイズについて質問する児童が多数いた。

「協力分担」について，《万寿東小祭り》でのなかま班会ではなかま班の班長を中心にして説明を行い，遊びブースの運営の前半と後半の当番分けや遊びブースの制作で協力してほしいところを伝えた。分かりやすく黒板に書いて説明したり，当番の詳しい内容まで決めたりと各班によって違いがでていた。遊びブース作りは，制作方法として2通りあり，全員でひとつずつ終わらせていく班と役割分担をしている班があった。役割分担の班には指示待ちの児童もあり，班長に依存する傾向も見られた。作業に関して教師はアドバイスする程度に留まり，児童が主体的に活動していた。児童が聞いてきた内容も道具や材料の手配程度であった。児童の4月からの作業状況と比べると格段に教師の指示を仰ぐ場面が減り，自ら考えて行動していた。

(2) 心理的レディネス

第3章で設定した指導目標の内，離陸期の心理的レディネスについて実際の作業状況・指導場面から考察した。

「自律心」について，4月の時点では教師に頼りがちだった6年生も11月には自分たちの活動を主体的にするだけでなく，活動の反省をしながら改善ができるようになった。

そこで教師はなかま班内での話し合い場面を増やすようにしていた。4月には6年生は下級生の世話だけで精一杯であったが、下級生にも役割を与え、責任感がもてるように配慮することができだしていた。6年生は遊びブースの係決めでも、簡単なものを選んで、下級生にさせるようにし、下級生自身にもできることを実感させ、徐々に責任ある行動ができるようにしていた。遊びブース作りでも教師に頼ることなく、自分たちで作り上げようとする意欲が高く、材料の確認や進捗状況を絶えず児童間で自発的に報告し合い、改善できるようにしており、反省・改善によってみんなでいいものを作り上げようとしていた。教師は見守るだけで、たまにある質問も道具貸し出し依頼ぐらいで、全て自分たちで作り上げていて自律心が増していた。万寿東小祭りが終わったあとでも今度は遊びのルールにふり仮名を振った方がいいとか順番待ちを少なくさせるために2ヶ所で遊ばした方がいいとか来年度に繋がる反省を出し、反省する態度の定着があった。

「相互依存心」について、教師は6年生がサポートする喜びを知り、自分達が率先して活動することができるようになったので、下級生にもサポートする喜びをわからせようとした。活動時には下級生にも役割を割り振りし、時間が多少かかっても協力する楽しさを味わうようになっていた。教師は6年生が自分だけでできそうにないことは下級生でもサポートしてもらうようにした。下級生にもなかま班のために協力したり、6年生を助けたりという喜びを感じさせ、サポートの必要性をわからせるようにした。仕事の割り振りも自分たちで適正に合わせてできていた。そんな様子を見下級生を見ると、余計に頼りがいがあるようで6年生の指示をまって仕事をしようとしていた。遊びブースの運営では6年生が一番重要な役をするのではなく、4・5年生にも多くの仕事を任せることでみんなで作り上げた実感できるようにしていた。

「一体感」について、11月になり、半年間の活動の成果により、なかま班が一体となっていた。6年生は一体感のよさを伝統として下級生にも感じ取らせたいという気持ちがあった。6年生の教えたい気持ちが前に出すぎているようだったので教師は模範を示しながら態度や雰囲気作りも大切であることを指導していた。万寿東小祭りの遊びブースは6年生ひとりひとりにこれをしてほしいというビジョンがあり、伝統と5年間の経験によってみんなが楽しめるものが何かを感じ取ることができていた。

第7章 効果的な異年齢集団活動指導法

第7章では2004年2月から2005年11月までのなかま班活動の調査を通して、児童がいかに成長してきたかをポートフォリオに書かれた感想文をもとに吟味し、今後の改善点を検討していった。

第1節 集団課題遂行スキルに関する児童の感想文

集団課題遂行スキルに関してはコンセンサス形成・タイムスケジュールに沿った行動力・協力分担の3ポイントを指導重点としてきた。直接この3つのポイントを到達目標として提示するような指導よりも、場面において必要なことだけを声かけする方法を用いていた。「包み込むような指導」により、自主性を喚起させようとしてきたのだが、実際にはどうであったかみていった。

(1) コンセンサス形成

《万寿東小祭り》は、離陸期の最大の行事であるが、それに加えて今回は、新しい遊びブースに挑戦する児童が例年になく多かった。その点を実感していた様子が表れている感想文。

計画を立てるときに自分から意見をいい、いろいろなアイデアを出して、店の名前や準備物などみんなが意見を出せていました。

お店のアイデアを出すのに困っていたときにみんながいっしょうけんめい考えてアイデアを出した。

計画の時は案を出しあって、記憶力判定テストになったが、考えているうちに店としてやれるかが心配になったこともあった。でもみんながそれをサポートしてくれるように意見を出してくれた。

いずれも前例のない企画をスムーズに運営できたなかま班の児童のものである。実際、これらの遊びブースは当日にぎわいを見せ、楽しそうに遊ぶ年少者の姿を観察することができた。

(2) タイムスケジュールに沿った行動力

児童がタイムスケジュールの意義を知るスキルである。見通しをもった行動ができるスキルでもある。計画と実践を併せ持つてはじめて可能となるためにスキル形成には時間がかかる。離陸期に入るとショートスパンでの見通しももてだし、ロングスパンでの計画も立てるようになる。《万寿東小祭り》では遊びブースの制作がメインとなるが児童が使える制作時間は短く、計画がきちんとしていないと完成できない状況に苦労した児童の感想文。

準備の時は他の班は休み時間を使って、作業をしていたのに私たちの班はすぐできると思っていたので何もしなかったために、みんなで作るときに時間内にできず、残ってやることになってしまったのが反省点です。

あらかじめ教師に提示された日程表をみた時点ではできると楽観的に考えていたが、作業最終日に仕上げることができず、放課後に作業を行い、さらには自宅に持ち帰ってしていた。本番ではこの反省を踏まえて、順調にできていた。遊びブース制作段階でイメージと技術に差が生じ、計画が実行できないところもあった。その対応に苦戦している児童の感想文。

計画では考えていたようなことが準備していると思うようにいかなかったり、すぐにはずれてしまったりして混乱してしまいました。

混乱してはいるのだが教師にはアドバイスをもらいに来ず、自分たちで工夫して製作していた。計画から実行まですべて自分たちで活動ができるようになっていた。

(3) 協力分担

離陸期になると役割分担をする中で不満も出てくるが、自我を抑え、会を円滑に運営するために協力しなければという気持ちも同時に芽生えてくる。《万寿東小祭り》の遊びブース運営で前半と後半のブースの当番を男女で分けた班の児童の感想文。

後悔していることは男子女子に分けたことで、男子のいいところ女子のいいところがまざら

なかったことです。でもこの失敗をきっかけにこれからの行動にいかします。

実際に会が始まり、他の遊びブースを回って気づいたり、運営中に困難な場面にぶつかったりしてもそれが自己反省につながっている。教師主導で反省させるよりも強く次回の活動に反映される。

第2節 心理的レディネスに関する児童の感想文

心理的レディネスに関しては自律心・相互依存心・一体感の3ポイントを指導重点とする。教師は全体に対しての話やモデルになる児童を紹介し、伝播させようとするなど多種の方法を用いていた。心の成長だけに全体が一度にということもできず、成長の度合いを判断することもできないため本人の自覚に頼る部分が大きいが大切な指導ではある。実際の成長がわかる感想文から、指導の定着をみていく。

(1) 自律心

離陸期になると自己の行動を反省し、改善もできるようになり、下級生の自律を促す配慮ができることが望まれる。《万寿東小祭り》では遊びブースの運営中のトラブルにも臨機応変に対処する場面がみられ、反省しながら実践へつながるようになっていた児童の感想文。

当日の朝の準備の時に、まとの輪が破れてしまった。テープで直すことはできた。

当日の準備の時、三人一組で勝負はむりだと気づき、急きょ変えることにした。

店番ではみんながお客さんに楽しんでもらおうという気持ちが伝わってきて、5年生の人達もがんばっていました。

タイムスケジュールに沿った行動というスキルを前提として自分達だけで問題を解決していた。下級生へ仕事を任せ、見守ることによって下級生にも自分でできることを理解させようとし、できつつあった。自己の自律に関しては遊びブース作成段階での係決めを積極的に行っている児童の感想文。

自分なりに全ての面で仕事を自分から引き受けられた。

責任感と積極性が表れており、2月から経験してきたことの自信の裏付けがわかる。何をすればよいかわかりだし、自主的な行動ができた結果でもある。

(2) 相互依存心

離陸期に入り、《万寿東小祭り》では頼られる側になった6年生の姿ばかりでなく、あえて下級生に頼ることによって、下級生にも人を助けることのよさを伝えようとしている。遊びブースの運営のときに4・5年生と協力しているときの児童の感想文。

4・5年生がすごく進んで店番をしてくれていたのも、すごくうれしかったです。私が言わなかったことでも進んでしているのですごいなぁと思いました。

みんなが楽しめるように楽しそうな看板を作ったり、4・5年生に何をしたらいいかを分かりやすく伝えたりしたい。まとめて言えば、みんなが楽しく、そして責任を持ってまた、下級生に協力の必要性が伝わっているところもあり、《万寿東小祭り》の遊びブース運営の時に景品のしおりが足りなくなり、急遽折り紙で作ったものをあげるように

段取りをすることになり，5年生が進んで手伝ったことがあった。

万寿東小祭りで苦労より，協力助け合いを知りました。5年生に作業を手伝ってもらって，「ありがとう」って言ったら「いいよ，これも班のためだよ。無事おわってよかったね」と言ってくれました。私はこんなにいい班のなかまがいてうれしかったです。

6年生の活動の様子を見ていた4・5年生の反応は何か自分もなかま班のためにしたいという気持ちである。6年生はその行動がうれしく，新鮮でサポートされるよさも感じていた。

(3) 一体感

離陸期には6年生は下級生のために何かしたいという意識が強くなる。会の回数を重ねるごとにスキルも高まり，自信もついてくるのか6年生は《万寿東小祭り》では，下級生への働きかけに思いが強くなった児童の感想文。

私たちもうけついで万寿東音頭をこんどは次の6年生にうけついでもらって来年も楽しい万寿東小祭りにしてもらいたい。

班のみんなで協力し，1年生から5年生の人たちを楽しませてあげる。お店の係の仕事をがんばる。下級生の子は分からない人もいるかもしれないから教えてあげる。

みんなを楽しませたり，最後なので自分も楽しんでみんなとのきずなを深めていきたい。それと6年生のバトンを5年生にわたす。

最後の万寿東小祭りだったけど，今までとは気持ちのモチようがちがった。今までは上に引っ張ってくれる自分よりも年上がいたけど，自分が6年生になったら頼る人は同級生だけ。だからちょっと不安。伝統をうけつぐことができたと思う。

下級生に伝統を伝えたい思いでいっぱいになっている。今まで自分達がお世話になってきた6年生を省みるとともに，下級生へ自分達のしてきたことを大切にしてほしいという希望で満たされている。

第3節 活動の反省と今後の課題

なかま班活動を指導計画から参加し，観察してきた。児童の感想文や活動の様子から取り組みの成果を本章で検証してきたが，抜粋した児童の感想文は最も優秀なものである。教師の指導目標に到達したものを取り上げており，3分の1の児童は到達していないスキルがある。上位の児童をさらに鍛えることも必要であるが，全員が指導目標の達成をできるようにすることが改善として重要である。ここでは，全員がスキル形成できる方法を提唱することを前提として検討していった。

本章での児童の感想文から判断するとタイムスケジュールに沿った行動の定着が最もできていないことがわかる。特にロングスパンでの見通しをもつことが困難でまだまだ指導の余地が残されている。6年間を見通した指導計画を立て，詳細なカリキュラムを作ることが段階を経たスキル形成になる。

カリキュラムとしては，6年間を見通した集団課題遂行スキルの形成段階の設定と心理的レディネスの構築段階の設定を行い，教師間で共通理解することが必要である。低学年時にはスキルの土台となる心理的レディネスを根付かせなければならない。集団課題遂行スキルに関しては4年生ぐらいの成長段階にならなければ形成は難しい。低学年であって

も意識しながら上級生の活動を見て、自身が活動するときに想起し、模倣することによってスキル形成がなされ、さらには発展へと広がる。

ただし、6年間の一貫した指導にも問題点はある。集団課題遂行スキル形成が早い児童はますます成長し、できない児童との差が開くことが予想される。エリート教育にもつながり、集団課題遂行スキル形成が遅い児童に劣等感や意欲低下が懸念される。また、教師間で意思統一をすることができていなければならず、異動できた教師の負担も大きく、児童の現状を把握することも困難になることは考慮しておかなければならない。

次に、6年間を見通した縦割り班活動を前提とした学年内での年間指導計画の作成である。子どもの成長には個人差が大きく、一斉に指導しても同じように目標達成することは不可能である。6年間の一貫した指導計画での問題点でも触れたが、一年間でも最低限のものは習得しておかなければ進級するほどに差が開き、同学年でも役割分担が明確化され、チャンス自体を失う結果になる。形成段階を学年内で設定することにより、より具体的な指導が各自に合わせてなされ、優秀な児童に役割が偏ることなくどの児童にも機会が与えられ、自分の適正を知る上でもよい活動になる。

児童の形成段階を詳しく知る手立てとして、評価基準の作成が挙げられる。第3章で述べた指導ヴィジョンが正に評価基準のもとに成りえる。教師は児童の支援のポイントを明確に判断して、指導目標の達成に力を注ぐことができる。個に応じた支援をすることによって、指導目標を達成できる割合も増す。全体のレベルアップが相乗効果となり、なかま班活動の発展になる。ただし、これには賛否両論があることも考慮しておかなければならない。行事に参加し、楽しむだけでよいという考えもある。経験するだけで自然に身につくものはあるし、詰め込む必要性は問われるところではある。実際に全学年に評価基準を設けて指導することは困難であると考えられる。先に述べたように低学年では心理的レディネスにしぼり、5年生後半から取り組むことが最善であろう。行事を行うためにはグループワークスキルは必要で指導しなければ会が成功しないという現状も踏まえてのことである。

現在、学校では縦割り班活動をゆとりの時間に行っているところが多い。ゆとりの時間内で十分なグループワークスキルの形成をねらった縦割り班活動を行うことは困難である。そこで時間を確保するために総合的な学習の時間を用いることが解決策になる。総合的な学習の時間での取り組みにすることにより、指導の観点を明確にすることや評価しながら児童の成長の状態を判断していくことは正にうってつけである。平成15年10月7日の中央教育審議会答申「初等中等教育における当面の教育課程及び指導の充実・改善方策について」でも以下のことが述べられている。

「総合的な学習の時間」については「時間」という名称から、教科等とともに教育課程を構成するものであると受け止められにくく、計画的な指導の必要性が理解されにくくなっているとも指摘されている。

総合的な学習の時間の取り組み方の問題点がでてくる。縦割り班活動を取り組みとし、カリキュラムを詳細に作っていくことは今求められている問題の解決になると考える。

最後に縦割り班活動と教科との関連についていくつか指導しておきたい。まず道徳との

合科が考えられる。縦割り班活動は心理的な成長を促すことが大きく、道徳の教材として実践での行動を取り上げ、知識だけの道徳と結びつけを図ったり、知識だけであったものを実践することで日常生活への定着に結びつくことになる。他には縦割り班内のペアを用いて、算数を教えることが考えられる。下級生にとってははていねいに教えてもらえ理解が十分にでき、上級生にとっては教えるために既習の内容を正確に理解し直すことによって基礎・基本の定着になる。ただし、この取り組みは教科としてよりもゆとりの時間を用いることになる。ゆとりの時間を用いた取り組みでは本の読み聞かせも考えられる。朗読の練習をし、表現力や読解力の強化をすることは国語へと繋がる。下級生も本が好きになったり、聞く力の学習になる。小学校という成長が著しい中では同じ学習内容を用いることはできないが同一の題材で社会科を使って地域の学習をすることができる。3年生で地域の様子を6年生で地域の歴史を学習する。そこで協同で取り組み、発表をすることによって意欲付けにもなる。

引用文献

- ・万寿東小学校10周年記念事業実行委員会 1982, 『倉敷市立万寿東小学校10年のあゆみ』西尾総合印刷
- ・万寿東小学校PTA 1988, 『PTA新聞』41号
- ・毛利猛 2004, 「小学校における「縦割り班」活動の現状と課題」『香川大学教育実践総合研究』香川大学教育学部, 23-35頁
- ・文部省 1989, 『小学校教育課程一般指導資料 異年齢集団活動の事例集』東洋館出版社

参考文献

- ・島久洋 1981 『集団の社会心理学』 啓文社
- ・住田正樹 1995 『子どもの仲間集団の研究』 九州大学出版会
- ・チェマーズ, M. M. 白樫三四郎訳 1999 『リーダーシップの統合理論』 北大路書房
- ・淵上克義 2002 『リーダーシップの社会心理学』 ナカニシヤ出版
- ・三隅二不二 1978 『リーダーシップ行動の科学』 有斐閣
- ・毛利猛・石原和子 2001 「異年齢の仲間づくりに関する研究 - 「縦割り班」の活動を中心に」 『香川大学教育実践総合研究』 香川大学教育学部 57-79頁
- ・毛利猛 2004 「小学校における「縦割り班」活動の現状と課題」 『香川大学教育実践総合研究』 香川大学教育学部 23-35頁
- ・文部省 1989 『小学校教育課程一般指導資料 異年齢集団活動の事例集』 東洋館出版社
- ・弓野憲一 1999 『特別活動と総合的学習の心理学』 ナカニシヤ出版